

「文」と『黄檗清規』

高 井 恭 子

一、はじめに

隠元隆琦（一五九二—一六七三）の渡来は、仏法を広めることが目的であった。^①その法とは、具体的に三教一致にあつたことが、『黄檗和尚扶桑語録』（復首座慧門公弁耆舊）から分かる。『黄檗清規』は、この隠元によつて撰述された禅宗寺院の規矩として知られている。実際に、その役割は、近世日本における禅宗の儀礼の中に中国の仏教儀礼を確認できることから、重要であつたと考えられる。黄檗宗はほかにも、近世日本の文献や書の文化にも大きく貢献していることは知られている。例えば、江戸初期の出版事業や、書道における唐様の書がそれである。

しかし、中国の仏教儀礼などが清規を介して伝わり、近世以降も保持することができた理由は、現段階において明らかになつていない。そこで、『黄檗清規』が果たした役割を、「文」といつた視点から、考察したいと思う。な

お、「文」は、日本文化において文献や書道に大きく関わつたと考えられるものである。

二、悟りと文字

「悟り」は「文」（文字・文章・書体）によつて表せないと言われている。『黄檗清規』の「尊祖章第三」は、悟り、すなわち見性成仏は文字によらないと達磨が悟つたと記している。しかし、悟りは、語録に残されたり、墨跡に揮毫されたりする。このとき清規は、規矩の役割を果たしてはいないのだろうか。

隠元は、智は「文」のあらわれであると述べたことを、「智者、典文以全雅也。」と、『松隱三集』自序に記している。

ここで隠元は、「文」が三才を備え、万物が一体化したもので、悟つたものを天の文という。この三才は、天道・地道・人道からなつており、道徳に一致して従うと『易経』説卦伝に記されることに由来するという。^④ 隠元は、聖人の道徳を

「悟り」、聖人が天について論じたものを「文」という語にあ
らわしたのである。『老子』下編第十二章には、聖人は公
の心によって徳を行うとある。隠元も道徳にあらわされた
「文」を「斯文之道(松隱三集)自序」と称している。本来、
斯文は、儒教の学問についていうが、隠元はその解釈を儒教
に限定させていなかったのではないだろうか。

「斯文」は、後漢の蔡邕の『篆勢』という書物に、「鳥遺跡、
皇頡循。聖作則制斯文。」とあるという。『篆勢』は、『晋書』
衛恒伝の『四體書勢』という書物に収録され、聖人が創った
という文字の発生を論じた書物である。ここでは「文」は文
字を意味する。また、『説文解字』叙も庖犧・神農・黄帝と
いった上古の聖人が、文字のはじめを作ったことを記してい
る。文字の起源を記した書物は、この『説文解字』叙や『四
體書勢』がもつともよく知られている。中国では、「文」を
聖人の悟りが顕れたものであるといい、「文字」をその徴と
考えたのである。

三、「文」をめぐる『黄檗清規』の役割

隠元の書記を務めた僧に、独立性易(一五九六―一六七二)
がいる。独立は、江戸初期の「唐様の書」に影響を与えたこ
とで知られる。一方で、三教一致論を唱え、聖人と悟りの関
係について『有兼別緒自剎分宗』にも論述している。また

『書論』という著述も残した。その冒頭「斯文大本」という
項目は、「字繇一畫之始、文成文義之中。(中略)則字者、文
之本、理之源也。」と記している。隠元や独立の記述からは、
悟りが「理」という語で表され、そのあらわれとして「文」
が用いられたことが分かる。ちなみに『書論』は、独立が一
般に認識されている書道史とは異なる理論を用いて論じたも
のである。⁵⁾

『黄檗清規』「梵行章第五」は、沙門の行いが書を習うこと
と典籍に博く通じることを定めている。その目的は、学芸に
乏しく見識が低い俗士や、妄念に迷った凡夫の智、すなわち
俗智を避けるためである。書と典籍に博く達した者は、書記
としてのつとめがあることも記されている。また、戒壇・度
牒に関する儀礼等や『大明會典』を遵守することを記してい
る。『大明會典』は、明の文官の規範である。この遵守は、黄
檗宗全体が書・典籍に敏感であったことや、書記の仕事が典
礼によって限定されていたことを想像させる。これは書記が、
法語・經典といった筆写を行うが、典籍や規範に通達してい
なければならぬからである。

「文」は、このように『黄檗清規』に頭わされ、典籍や仏
教儀礼の中に確認することができる。規矩としての威力は叢
林で行われるほかに、出版などの社会事業を通して文化への
定着を果たしたのではないだろうか。例えば、先の独立は、

『書論』の理論に基づいて文字学の基本図書を示しているが、江戸初期に刊行された辞書類と符合する。また、黄檗の出版に用いられた書体や書式などが、現在我々の身辺において確認できるのも、こうした規範性が強く伴っていた可能性を考えたい。

四、三教と文字の関係

次に、仏教が「不立文字」を主張するのに、何故儒教といった解釈を用いるのかという問題について考えてみたい。

独立性易の『有蕪別緒自刻分宗』という著述には、「自得之一機、曰聖、曰仏、曰仙。非別有致中之一性而已矣也。」とある。聖は儒教、仏は仏教、仙は道教をいうから、独立の思想は三教一致に基づいていたと考えられる。一方、隠元も「道通三教敬心。」などと、三教一致を考えていたと思われる記録がある。すでに、中国では元の時代に静斎学士の劉謐が『三教平心論』を著述している。『三教平心論』には、「嘗中國之有三教也。(中略)大抵儒以正設教。道以尊設教。佛以大設教。〔大正蔵〕卷五二」とある。中国においては、隠元が帰化する以前に、三教一致論が進んでいることは知られるところとなっている。

ちなみに、ここでも伏犧の書(八卦)は、儒教の聖人である伏犧の悟りの徴として取りあげられている。このようなこ

「文」と『黄檗清規』(高井)

とから、「文」は悟りの徴であり、文字と深く関係すると認識したことが窺える。

五、結びにかえて

以上「文」が、『黄檗清規』に規定された規矩としての威力を発揮し、江戸初期における仏教儀礼や文化に顕れることについて考察を進めた。言い換えれば、明末清初の中国の典範や叢林の規矩が、江戸初期の日本に移入された例であるといえる。『黄檗清規』と「文」の関係が、書跡や書法と一緒に移入されたことや、独立の独創的な思想について検討すべき問題が多いと思う。

- 1 平久保章『隠元』(吉川弘文館、昭和三十七年)。
- 2 鎌田茂雄『中国の仏教儀礼』(大蔵出版、一九八六年)。
- 3 大槻幹郎『草創期黄檗の出版について』(『黄檗文華』第一一六号、一九九六年)。
- 4 公田連太郎『易经講話』五(明德出版社、昭和五十六年)。
- 5 拙稿「独立性易の六義解釈について」(『黄檗文華』第一一八号、平成十一年)。

(キーワード) 三教一致、文字、書記

(国際仏教学大学院大学研究生)